

---

# 魔探偵口キRAGMAROK ~ 蘇る記憶 ~

GORO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔探偵ロキRAGMAROK〜蘇る記憶〜

### 【Nコード】

N6464H

### 【作者名】

GORO

### 【あらすじ】

神じゃなくなったロキとロキとの記憶を失ったまゆらが繰り広げる物語

## 第1話 始まった時間

魔探偵口キRAGNAROK

（蘇る記憶）

### 第1話 始まった時間

窓から朝日がいいる中、大堂寺まゆらは目を覚ました。

そして、布団から起き上がり体を伸ばした後、机の上にある写真立てを見た。

そこには自分一人が写った写真があった。しかし何故かその写真には違和感がある。

そして何故かそれを見ると悲しみが沸き上がってくる感じがした。

すると…

「まゆら〜！朝だぞ〜！！」

父親の声が聞こえてきた。まゆらは、はい！！…っと言って急いで部屋を出た。

そして、学校へ行き授業を終え、まゆらは急いである場所へと向かった。

そこは大きな家が崩れた跡地だった。しかし、まゆらは気にせず中へと入って行く。

すると、崩れた跡地の奥に木材の一軒屋がありその一軒屋の外壁には燕雀探偵社と書かれた看板がかけられていた。

まゆらはそれを見た後、わくの両面がガラスできたふすまを開けた。

「やあ、まゆら、今日は早いだね」

するとそこには薄い栗色の髪の毛をした男が膝に黒い犬を乗せながら椅子に座っていた。

第2話 頼み事（前書き）

ロキの喋りかたが難しい…

## 第2話 頼み事

### 第2話 頼み事

燕雀探偵社の家の中にいた男にそう言われたまゆらは鞆を近くにあった机に乗せ…

「うん、今日早く授業が終わったから走って来ちゃって」

つと違って近くの椅子に座って息を吐いた。男はそんなまゆらを見て、フフツツと笑いながらコップにお茶を注いでまゆらに渡した。

「あ…ありがとう…」

まゆらは男にそう言ってコップを受け取り、ゴクゴクつと音を出しながらお茶を飲んだ。

そして男はそういうふうにしてお茶を飲んでいるまゆらを見て、廃墟とかした豪邸で邪神ロキとしてまゆらと接していた事を思い出した。

すると…



「ねえ」

まゆらがロキの目の前まで近づきそう言った。

「うわあ!？」

ロキは目の前のまゆらに驚き、ズテン!!!と後方へ椅子と一緒に転じた。

「だ…大丈夫？」

「あ…ああ…で、何？」

そしてロキはまゆらにそう尋ねると…

「あ、うん。実は…」

つと言いながら鞆から一枚の紙を渡した。

「まゆら…これ何？」

そしてロキはまゆらから受け取った紙を見て目を背けるまゆらにそう言った。

何故なら…

「ミステリー旅行」  
一泊二日探検ツアー

参加者二名以上

と書かれていたからだった。

「お願い!!一緒に参加して!!」

「……………他にはいなかったの？」

そしてロキがそう尋ねると、まゆらは部屋の隅っこで落ち込んだ。

ロキはそんなまゆらを見て、小さくため息をつき……

「いいよ、行くっか」

っと言った。まゆらはそれを聞くと、ありがとう……っと言って笑った。

そして数時間後……

「まさか、今日だとは思わなかったよ…」

ロキは大きい荷物を持ちながら同じように荷物を持つまゆらと歩いていった。

「それにしても車がダメだなんて思わなかったな」

まゆらは、ロキにそう言いながらため息をついていた。

そしてそんな事を言っている内にロキたちは三時間掛けて目的地にたどり着いた。

第3話 別荘と出会い（前書き）

何故か文章が短い…

### 第3話 別荘と出会い

#### 第3話 別荘と出会い

まゆらの頼みでミステリー旅行に行く事になったロキは目的地に着いた時、へえ〜…っと言いながら目の前に広がる風景を見た。

そこは都会ではあまりお目にかかれない自然豊かな森林があり、ロキの右側には綺麗な泉が広がっていた。

すると…

「まゆら〜!」

前方から私服姿の女性がまゆらに呼びかけながら走ってきた。

「里美！」

まゆらは前方から走ってくる女性にそう言って、手を降った。

そして里美はロキたちの目の前で止まりまゆらと両手を繋ぎながら喜んだ。

「久しぶり、まゆら！」

「うん！久しぶりだね、里美！」

すると里美はまゆらの隣にいるロキに気づき、まゆらに尋ねた。

「ねえ、まゆら、この人は？」

「この人は私が助手になってあげた探偵さん」

まゆらは里美にそう言って、えっへん！と言った。ロキはその隣で苦笑いをした。

そして里美はロキに、狭間里美ですつと名乗り、長話もなんだからつと言つてロキたちを森林のちよつと先にある別荘へと案内した。

「はい、どつぞー！」

そして里美はロキたちにそう言っただアを開け、ロキたちは、お邪魔しまーすつと行って中に入った。

すると…

「おい、狭間！！野菜は切つといたぜ！！」

部屋の奥から学生服を着た男が手には木刀を持ちながら出てきた。

するとその男はロキを見た瞬間立ち止まり、里美は、どうしたの？つと言った。そしてまゆらは、えっ？えっ？つと言いながらロキを



見た時、ロキは目を見開いて驚きの表情をしていた。

そしてロキは…

「ナル…カミくん………」

つと言つと、ナルカミと言われた男は…

「ロ……ロキ……」

っと言った。

### 第3話 別荘と出会い（後書き）

どこか変な所があれば教えてください。

## 第4話 腐れ縁（前書き）

まゆらの名前を繭良に訂正しました。

## 第4話 腐れ縁

### 第4話 腐れ縁

ミステリー旅行で訪れた別荘で北欧神、雷神トールと呼ばれていた鳴神と遭遇をしたロキは驚いた表情で鳴神を見ていた。

すると里美が鳴神に尋ねた。

「え？…ナルの知り合い？」

「あ、ああ…知り合いって言うか、まあ……腐れ縁だな！」

鳴神は里美に苦笑いしながらそう言って、里美は怪しいという目付きで鳴神を睨んでいた。

ロキはそんな二人を見て呆然としていると…

「ロキ……………」

隣にいた繭良がそう呟いた。ロキは、ハッ……としながら隣にいる繭良を見ると……

繭良は何か深刻な顔つきをしていた。すると空気の読めない鳴神が……

「お！久しぶりだな大道……」

と言おうとし、ロキはそれにすかさず気づき鳴神の胸元に拳を入れた。そして繭良たちがその光景を見て呆然としている中、ガクツ……となった鳴神を背負ってロキを外へと出ていった。

そして別荘から離れた所にあつた泉にロキと目を覚ました鳴神がいた。

「お前、久しぶりの再会にボディブローはねえだろ!!」

「いやあ……………あれは仕方なかったって言うか……………」

鳴神は、仕方なかったですむか!!…とロキに怒鳴ってロキは、まあまあ……と云って話あつた後、二人はふっ…と笑つた。

「それにしても元気そうだね、ナルカミくん」

「ああ、お前が居なくなつてから色々あつたけどな」

鳴神は落ちていた小石を泉に投げながらそう言い、木刀を担ぎながらロキを見た。

「それにしても、お前と会えるとは思わなかつたぜ、来て正解だつたな。」

「来て正解？そつえば何で地上に来たの？」

ロキは不審な顔で鳴神にそう尋ねると、鳴神はロキに…

「俺ら神々の女神様からの依頼でな。」

そう言った。

「女神様？……………それつてもしかしてフレイヤ？」

「ああ、この森林に何か違和感があるからを調査しろつてな。」

そしては鳴神の話を聞いたロキは、なるほど…つと頷くと、うん？つと言つた。鳴神は、どうした？つとロキに尋ねると…



「確かに調査しに来たっていうのは解ったけど……、何で学生の姿なの？」

ロキは鳴神にそう言いながら指をさした。鳴神はそれを聞かれて、体をうつ！……となった。

そして数分後…

「フフツ……っじゃあキミとヘイムダルだけ戻れなかったの……  
フツ……」

「おい、こちとら笑い事じゃねえんだよ」

ロキは鳴神の話を聞いて笑いながら鳴神を見ていた。そして鳴神は、  
まったく……っといって腕を組みながら不機嫌な顔をしている……

「ナル〜!〜!」

別荘から里美の声が聞こえてきた。鳴神は、おっ！！飯か！！とさっきまでの不機嫌な顔から一転して笑顔でそう言つと、

「早く行こうぜ！」

鳴神はロキにそう言いながら別荘へと全速力で走っていった。

ロキは、全速力で走って行く鳴神を見て、変わってないな……つと言いながら小さく笑った。そしてロキはあの時の繭良の顔を気がかりにしながら別荘へと歩いていった。

#### 第4話 腐れ縁（後書き）

文章でおかしな所があったら教えてほしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6464h/>

---

魔探偵口キRAGMAROK ~ 蘇る記憶 ~

2010年10月9日04時58分発行